



洋子と明美は、海岸の波打ち際からちょっと離れた砂浜に坐っていた。

「よかったね、明美！ ポスターが入賞して」

口数の少ない明美は、「うん」といつてにつこりし、色白の頬にかかる茶色っぽい毛を払った。絵の上手な明美は、「火災予防」のポスターで県のコンクールに入賞したばかりだ。

洋子も明美のように絵がうまくなりたい。でも、とても無理だ。絵が下手なことに加えて視力が六年になつてからどんどん下がっている。メガネをかけなければいけないことはわかっているが、父が病気で亡くなつてから働きに出ている母に、メガネを買ってほしいとなかなか言い出せないのだった。

明美は小さい時に中耳炎をしたせいで耳がちよつと聞こえにくい。目の悪い洋子と耳の悪い明美は、そんなわけで六年二組の教室のいちばん前の席に並んで坐っている。

明美の家は、海に近い松林の中にあつて、母は病気で寝たきりだった。一間しかない小さな家で、明美は学校から帰るとすぐに弟と二人で母の看病をしている。でも洋子は時々こうして明美を誘って海辺に遊びに行く。

洋子の父は三年前、洋子が三年生の時、直腸がんという病気で亡くなった。母は近くの中学の教師をしているが、いつも帰りは洋子より遅く、近所の七十歳をこえたコウおばさんが食事の支度をしてくれている。